様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 15 日現在

機関番号：21301
研究種目：若手研究（B）
研究期間：平成 21 年度～平成 22 年度
課題番号：21792223
研究課題名（和文）キネステティク看護援助による身体的効果に関する研究

研究課題名（英文）　Physical effectiveness of nursing support using kinaesthetics

研究代表者
只浦寛子（　宮城大学看護学部・准教授　）

研究者番号：40363733

研究成果の概要（和文）：

本研究では、キネステティク（Kinästhetik：独語表記, Kinaesthetics：英語表記）という動きと感覚のコミュニケーション概念を応用した看護援助の有用性に焦点をあて、キネステティク看護援助による身体的効果について調査・検討することを目的とし、慢性期にある患者を対象とし、Physion MD（フィジオン社）を用い身体循環動態評価としての水分率（浮腫）、筋肉量、最大筋力、基礎代謝量、体重支持指数（WBI）を非侵襲的に測定評価し、特に昨年度把握された効果の著名なアウトカムファクターついて分析・検討した。身体循環動態評価としての水分率（浮腫）は有意に低下する可能性が示唆されたが、浮腫傾向の低い症例については、効果として明確なデータが得られにくいことから、浮腫保有群を選定した研究デザインで再度検討する必要がある。筋肉量、最大筋力、基礎代謝量、体重支持指数（WBI）については、有意差を得るにはさらに長期的な評価が必要であることが示唆された。筋肉量そのものは、健常者かつ成人期でも2か月要するという報告もあり、長期関研究評価デザインで再度検討する必要がある。また、比較対象群において、理学療法的な介入コントロールが厳密になされることや、回復に従って自立度が改善することによる影響も考慮する必要がある。筋肉量の維持について有意な効果があることから、廃用症候群予防として効果が期待できる。また、関節可動域やバランス、感覚の改善等に有意な効果が表れやすい可能性があることから、評価指標についても短期的効果および長期的効果の一つ一つ焦点化して引き続き検討を進めることが必要である。本研究によって、キネステティク概念を看護支援に応用し、朝から次の朝が来るまでのあらゆる動きと感覚とコミュニケーション支援にキネステティクを導入することで、身体的な治療効果が期待できる可能性が示唆された。さらなる研究をすすめることで画期的なイノベーションとしての看護支援技術として科学的根拠を得ることができる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I focus on the usefulness of applying the “Kinaesthetics” concept of nursing aid known as applied concepts among movement , sense and communication.
I investigated the physical effects of kinesthetic nursing support in patients in the chronic phase of illness. I used Physion MD to aid in body composition measurement. The noninvasive measurements were included moisture regain to evaluate changes in body circulation, muscle quantity, maximum muscular strength, basal metabolic rate, and weight bearing index (WBI).　Decreasing moisture regain as one of the physical circulation change evaluation has been suggested.But it is necessary to examine in research design devided level of moisture regain. It is difficult to find clear data in low level of moisture regain. In terms of quantity of muscle, maximum muscular strength, basal metabolic rate, and weight support index, it has been suggested that a longer-term evaluation is necessary to determine significant differences. The intervention must cover a period of at least two months because it is reported the term is needed even though it is in the life of healthy adult subject.In addition, it is

necessary to make a close investigation having the comparison group. Moreover, it is necessary to consider the influence of physical recover process naturally. It is important to examine the impact of improved independence as recovery progresses. There might be a significant effect on maintenance of muscle mass by Kinaesthetics. This shows that Kinaesthetics can be effective in the prevention one of disuse syndrome. In addition, Kinaesthetics might be effect on improvement for range of motion, balance and sense. Clinical studies focused on short-term effects and long-term effects are required with each evaluation index to measure meaningful effects. In this study, Kinaesthetics approach can achieve a physically curative effect in all nursing support applied Kinaesthetics concept related to movement, sense, and communication. Future studies may establish scientific grounds for thich as a nursing support technique and an epoch-making innovation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	3, 400, 000	1, 020, 000	4, 420, 000
2010 年度	100, 000	30, 000	130, 000
年度			
年度			
年度			
総　計	3, 500, 000	1, 023, 000	4, 550, 000

研究分野：臨床看護
科研費の分科・細目：
キーワード: キネステティク、キネステティクス、身体的効果、Kinästhetik、Kinaesthetics、Physical effectiveness

１．研究開始当初の背景

社会の急速な高齢化に伴い，身体障害(disability)をはじめ慢性疾患を抱える高齢者も劇的に増加し，大きな社会的課題となっている。高齢者においては，体力低下が身体障害の主要原因の一つであるため(JAMA 281:558-560,1999)，その予防と治療も重要な社会課題となっている。ドイツ・スイス・オーストリアにおけるキネステティク先進国では，キネステティクによる身体的な健康増進に関する多くの報告があるが，これらの研究はいずれも対象者数の少ない症例報告であることや，専門家の意見が中心となっている。慢性疾患を対象として，キネステティクの身体効果に関し，身体的効果を実証し，明らかにすることが現在，国内外の重要課題となっている。

２．研究の目的

本研究では、キネステティク（Kinaesthetics：動きと感覚のコミュニケーション概念）を応用した看護援助の有用性に焦点をあて、臨床における患者を対象とし、キネステティク看護援助による身体的効果について調査・検討することを目的とする。約20年の実績をもつドイツ・スイス・オーストリアにおける看護成果報告、および申請者のドイツ・スイス・オーストリアにおける先行調査から示唆を得た結果、今まで少数

の症例検討やエキスパートオピニオンで報告されてきた患者や在宅療養者、障害者に対するキネステティク看護援助の身体的効果に関し、観察的研究デザインに基づく、具体的な身体測定評価と検討が必要であることが明らかになった。本研究の目的は、キネステティクが実際に、患者へどのような身体的効果つまり健康増進作用をもたらすかに関して、キネステティク導入群と非導入群の比較検討を行うことで、キネステティク導入群の身体的効果について明らかにすることである。

３．研究の方法

キネステティク看護援助による身体的効果について調査・検討することを目的とし、慢性期にある患者を対象とし、Physion MD（フィジオン社）を用い身体循環動態評価としての水分率(浮腫)、筋肉量、最大筋力、基礎代謝量、体重支持指数（WBI）を非侵襲的に測定評価し、特に昨年度把握された効果の著名なアウトカムファクターついて分析・検討した。

４．研究成果

身体循環動態評価としての水分率（浮腫）は有意に低下する可能性が示唆されたが、浮腫傾向の低い症例については、効果として明確なデータが得られにくいことから、浮腫保有群を選定した研究デザインで再度検討する必要がある。筋肉量、最大筋力、基礎代謝量、体重支持指数（WBI）については、有意差を得るにはさらに長期的な評価が必要であることが示唆された。筋肉量そのものは、健常者かつ成人期でも２か月要するという報告もあり、長期関研究評価デザインで再度検討する必要がある。また、比較対象群において、理学療法的な介入コントロールが厳密になされることや、回復に従って自立度が改善することによる影響も考慮する必要がある。筋肉量の維持について有意な効果があることから、廃用症候群予防として効果が期待できる。また、関節可動域やバランス、感覚の改善等に有意な効果が表れやすい可能性があることから、評価指標についても短期的効果および長期的効果の一つ一つ焦点化して引き続き検討を進めることが必要である。本研究によって、キネステティク概念を看護支援に応用し、朝から次の朝が来るまでのあらゆる動きと感覚とコミュニケーション支援にキネステティクを導入することで、身体的な治療効果が期待できる可能性が示唆された。さらなる研究をすすめることで画期的なイノベーションとしての看護支援技術として科学的根拠を得ることができる可能性がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

1. 只浦寛子，徳永恵子他：キネステティク概念を応用した看護支援の可能性－医療のパラダイムを変革するキネステティクを科学する－，日本看護技術学会誌９巻 1号,21-24，2010.
2. 目黒奈津子,只浦寛子，徳永恵子：キネステティク概念を応用した体位変換の臨床導入方法と教育方法のノウハウ―キネステティクを導入した施設における実態調査から―,日本キネステティク研究会誌２巻 1号，10-16，2010.
3. 目黒奈津子,只浦寛子:看護師のキネステティク時間感覚と接触感覚 ,日本キネステティク研究会誌２巻 1号,17-23，2010.

〔学会発表〕（計 12 件）

1. Hiroko Tadaura, Keiko Tokunaga：New innovative care: Kinaesthetics and its outcomes.(11th World Congress Self-Care Deficit Theory) only Abstract submission
2. 只浦寛子 ： 終末期にある患者に必要とされる安楽な体位変換、キネステティク概念の可能性－，第25回日本がん看護学会学術集会，2011 年 02 月(神戸).
3. 只浦寛子、徳永恵子: キネステティクトレーナーの上方移動の特徴，第 9 回日本看護技術学会学術集会，2010 年 10 月(愛知).
4. 只浦寛子 ： 患者の動きの支援場面における看護師の技術レベルを評価する新しいツールSOPMASを用いた評価，第 9 回日本看護技術学会学術集会，2010 年 10 月(愛知).
5. 只浦寛子、徳永恵子:片麻痺をもつ人の

上方移動における特徴と、褥瘡をはじめとする廃用症候群のリスク，第 7 回日本褥瘡学会東北地方会学術集会，2010 年 07 月(仙台)

6. TadauraH, TokunagaK : Medical staffs' subconscious awareness of positioning change for patients in a terminal stage ,16th International Conference on Cancer Nursing（第 16 回がん看護国際学会），2010 年 03 月(Atlanta).
7. 只浦寛子、徳永恵子: ヨーロッパ ICU 病棟についてキネステティク看護はどのように導入され継続教育されているか，第 29 回日本看護科学学会，2009 年 11 月(幕張).
8. 只浦寛子、徳永恵子 ： オーストリアにおける遷延性意識障害者へのキネステティク概念を応用した看護支援，第 29 回日本看護科学学会，2009 年 11 月(幕張).
9. 目黒奈津子、只浦寛子、徳永恵子:キネステティクの臨床導入方法と看護師の抱える課題―キネステティクを臨床導入した施設における実態調査から―，第２回日本キネステティク研究会，2009 年 11 月(仙台).
10. 只浦寛子、徳永恵子:人の自然な動き：上方移動、第 8 回日本看護技術学会，2009 年 09 月，(旭川）.
11. 只浦寛子:新しい動きの看護支援評価ツール SOPMAS とは何か，第 8 回日本看護技術学会，第8回日本看護技術学会，2009 年 09 月，(旭川）.
12. キネステティク概念を応用した看護支援の可能性―医療のパラダイムを変革させるキネステティクを科学する―，第 8 回日本看護技術学会，2009 年 09 月，(旭川）.

〔招待講演〕(計 7 件)

1. 只浦寛子：キネステティク概念を応用した看護支援～いのちを輝かせる看護とその技術～，男鹿みなと市民病院. 2011 年 2 月（招待講演）.
2. 只浦寛子：キネステティク概念の臨床応用と効果，日本キネステティク研究会，宮城大学大和キャンパス，2010 年 11 月 14 日．（招待講演）
3. 只浦寛子，徳永恵子：キネステティク実践講座，第 12 回日本褥瘡学会学術集会，日本褥瘡学会，幕張メッセ,2010 年 8 月 21 日.（招待講演）
4. 徳永恵子，只浦寛子：「キネステティク概念を応用したポジショニング」　ポジショニングに生かす新しい考え方 ，日本在宅褥創ケア推進協会主催，青森中央短期大学,2010 年 7 月 11 日（招待講演）
5. 只浦寛子：高齢者の生命を輝かせるキネステティク看護・介護，宮城県介護研修センター，2010 年 7 月 3 日．（招待講演）
6. 只浦寛子：キネステティク世界の流れ最新情報，日本キネステティク研究会主催，宮城大学,2009 年 11 月 13 日．（招待講演）
7. 只浦寛子：重力磁場・地球で１００年健康に生きるには―キネステティクから学ぶ―,大崎市民講座，大崎市，2009 年 7 月 18 日．（招待講演）

６．研究組織

(1)研究代表者

只浦寛子（宮城大学看護学部・准教授）

研究者番号：40363733